

今日の箇所は、最後の晩餐の記事の中にあります。13章冒頭にイエスによる洗足の記事に続いて弟子の裏切りの予告（18〜30節）があり、14章からは告別説教が始まりますが、その間にはさまれている箇所です。ここでイエスが新しい戒めを宣言されるのです。時は「夜であった」という30節が、ユダの裏切りを象徴的に表わしたあと、イエスの受難が神と御子にとって「栄光」（トクサ）であるということです。ユダは「光」である主イエスに背を向けて、罪の暗闇に向かつて「夜」の闇に消えたのです。逆に言えば、ユダが出て行ったことで、初めて「光の子」（弟子たち）が外の闇から分けられ（裁かれ）て、彼らとイエスだけが明るい光に照らされるようになったのです。

31節の「今や」とは、決定的な十字架刑死の事件が起こることを告げています。ここでの「人の子」はイエスを表わすのですが、そのイエスが「栄光を受けた」と言うのです。これは時制がアオリスト形なので、さまざまに訳せるのですが、ここでは、ユダの裏切りと同時にイエスが「栄光を受け始めた」という意味です。栄光というのは、救いをもたらす信仰、永遠の命に至らせる信仰が人間の間根づくことを言っています。ですから、ユダに裏切られたことで、明確にイエスが人間の間根づく時が来たと言うのです。しかも、神が受難を受けるイエスによって栄光を受けるのです（32節）。ユダは裏切るために弟子集団から出て行ったのですが、人間的な裏切りによって、イエスが栄光を受けることの始まりが引き出されたのです。思い出していたください。イエスは13章11節で『イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである』と云ったのですが、26節では『イエスは、「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった』と、今度は明確にユダを名指したのです。しかし、イエスは自分を裏切ろうとしているユダを他の弟子たちと同様に扱い、その足すら洗おうとしたのです。洗った後、イエスはユダに3度呼びかけて、その裏切りをとどまらせようとしています。けれども、ユダはますます心をかたくなにして、裏切りへの道を突き進んでいったのです。そのことを実行に移すために、弟子集団から離脱したのです。ですから、イエスは確定した受難を受け入れて、31節の言葉『今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった』と語ったのです。

それにしても、なぜ苦難を受けることが栄光を受けることになるか。裏切られたのに栄光を受けると言うのはどういう意味なのかを考えてみたい。33節で『わたしが行く所にあなたたちは来ることができな』と、別離の宣言をしています。16章7節によると『実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る』と言っています。これはどういう意味なのでしょう。それは弟子たちが、聖霊によって信仰的に自律の道を拓くためなのです。神に対して依存を生み出す愛は本当の愛ではないからです。イエスとの別離の悲しみを乗り越えて自律に向かうように導くのが真の愛なのです。33節で、あなたがたはわたしを捜すだろうが、わたしが行くところにあなた方は来ることができな』と宣言しているのも同じ理由からです。別離が本当の意味で愛の成就であるならば、それは決定的<sup>1</sup>に実行されなければならないのです。

十字架刑死ということは、究極的な自己放棄です。死によって主イエスが去って行き、その事態に向き合うことは、主イエスとの別離を意味しているのですが、この世における別離が「すべての終わり」ではないのです。そこから始まりが起きるのです。そのためには、不断に自己が打ち砕かれるということが主イエスの十字架の死を契機に、この世に遺された弟子たちには生起するのです。十字架刑死に直面して、それまでの自己が解体して、自分自身も死に瀕するのです。そこに信仰の歩みが起こるのです。

確かに、信仰生活において、私たちは様々に祈ります。健康になるように、試験に受かるように、仕事がうまくいくようにという祈りから、事態を受け入れる力を求める祈りまでさまざまです。けれども、それらの祈りは、実は自分から一步も離れていないのです。自分に密着しすぎている！ 別の言い方をすると、私たちは信仰生活をしながら、常に自分のために祈っている。自分のためにしか祈ることができなくなっている。ある意味で祈りが自己実現であったり、自己の欲望を達成してもらおう手段になっているところがある。しかし、主イエスの十字架刑死はそのような信仰理解を根底から覆していくのです。

主イエスは御自分が神のもとに行って、弟子たちと決定的な別離をすることで、新しい戒めを語っています。互いに愛し合うことを勧めています。イエスが弟子たちを愛するように、イエスの十字架刑死においては初めてその完全な決定的な表現をとる愛に目覚めるためなのです。ただし、誤解をしてはいけません。主イエスが十字架刑死を受容したのは生きることを放棄したのではなく、弟子たちを愛し切るためであったのです。つまり、主イエスの十字架刑死は自分の命の放棄ではなく、本当の命を贈与するためだったのです。そこでイエスが最も心にかけていたことは、人間相互の愛です。ペトロが『あなたのためなら命を捨てます』（13章37節）とまで言って、主イエスへの真心と忠誠心を表明したのですが、イエスへの愛は「弟子たちの相互の愛」に具体化すべきなのです。そのような主イエスの意図を受け入れられないならば、イエスとは『何のかかわりもないことになる』（13章8節）のです。そして、結局は主イエスを三度否むような結果を招いてしまうのです。

イエスは新しい掟として、互いに愛し合いなさいと言っています。この隣人愛の実践によつて、イエスの弟子であることが多くの人に認知されるようになります。34節、35節は解釈されてきました。この隣人愛の実践がキリスト教の基本的な教えであるかのように解釈されてきました。けれども、この隣人愛の実践という教理が多くのキリスト者を苦しめてきたという側面もあるのです。隣人愛を実践できない自分を責め続けてきたキリスト者の方のいかに多いことか。

たとえば、相手に自分のイメージを押し付けて「あなたは○○な人」とか「友だちじゃないか。○○○してよ」「君は○○○と言ったじゃないか」という発言や要求をしてくる人は、自分を利用しようとしていることがわかります。そういう人に対して隣人愛を実践することは難しいものです。けれども、キリスト教の隣人愛の教えとは関係がありませんが、私たちは小さい時から、学校で『みんなと仲良くしなさい』と言われて育っています。けれども、敢えて「誰とでも仲良くしようとしてはいけない」と言ってみたいと思います。教会員の方からしばしば質問されることに、『私にはどうしても仲良くできない人がいます。それは不信仰なのでしょうか』という質問があります。「キリスト教信仰では、神が出会わせてくれた隣人を愛しなさい」という不文律のような教え<sup>2</sup>があります。でも、実際の人間関係では、とても仲良くできない人が自分の周囲に

は必ずいるものです。なかなか仲良くできない人は、対人関係で自分の都合のいいことを他人に押し付けてくる場合が多いからです。決して、相手の人を尊重しようとか、相手のことを大切に考えていない人と仲良くすることは難しいことです。なぜなら、人間関係を破壊しても構わないと考えて行動している人だからです。このような人に共通しているのは、自分よりも弱い立場にある人、自分より立場的に弱いと考えている人を躊躇なく攻撃することです。ですから、攻撃された人は仲良くできないと感じてしまうのです。仲良くしようとしても、相手は攻撃的で、人間関係を破壊的に考えている人ですから、隣人愛を実践できるような相手ではないのです。

イエスが新しい掟として互いに愛し合いなさいと言ったのは、人間関係を破壊的に考えている人でも愛しなさいと言ったのではないのです。互いに人間として尊重し合える関係性を築くことを念頭に持っている対等な立場から人間関係を築こうと人のことです。聖書でも、そういう理不尽な人に対しては人のいないところで誠実に忠告することをお勧めしています。イエスの教えは、神の前で人は等しくある存在として、互いに愛し合いなさいと言っているのです。この導きの言葉に従って、いろいろな考えの違う人とも対等な人間関係を築いていきたいと思えます。